

(ジャーナリストの会のページ)

ススキ野原を晩秋の風が吹き過ぎていく。雑木林ではナナカマドが赤く色づき、コマユミの清楚な実が揺れていた。谷川岳に初冠雪が見られた十月二十二、二十三の両日、利根川源流部のダムがある群馬県水上町藤原地区を訪ねた。

★森林ボランティアの可能性を追求

「森林塾青水」という市民団体が町有林二一鈔を借り、保全活動に取り組んでいる。全国的にも珍しい茅原の保全と利用を目的にしており、「入会慣行の現代的意義

「コモンズ」の復権

群馬県水上町、
森林塾青水の試み

を考える」が合言葉だ。プランナーの浅川潔さん（一九六〇年生）ら林政ジャーナリストの会のメンバー数人がこの活動に加わっている。この日も鎌をもった人々がススキ野原の中に道をつくり、チェーンソーで雑木を切り倒していた。

九九年に利根川流域で活動する木工家と都市住民が、森林ボランティアの会を結成した。塾長の清水英毅さんは「森が育む木と水の文化を愛し、源流域の里山の景観を大切に、先人が自然との関わりを通して培った暮らしの知恵に

学び、それらを現代に継承し活かしたい」と塾の精神を説明する。

森林ボランティアは〇三年現在で全国に二一六五団体ある。林野庁が九七年に調査を始めた時には二七七団体だったが、三年ごとに倍増する勢いだ。下刈り、除間伐、枝打ち…。彼らによって整備される森林の面積は四、二〇〇鈔という。その六割が「里山など身近な森林」で活動することに積極的な意義を見出している。

森林塾青水の活動の歩みをたどると、いわゆる森林ボランティアたちが単に森を好む趣味の人々から、社会活動の担い手へと目覚めていく過程がよく理解できる。

〇一年にワークショップと自然観察会、「樹種見本」の作成と木工作品展などを現地で行った。〇二年は「現代版・入会慣行」を考える集いを東京で開催し、水上町でも現地フィールドスタディ。〇三年四月には元・入会地であった町有林二一鈔の土地賃借契約を水上町と締結し、本格的な茅原の保全活動を行うようになった。

★ススキと人間との関係復元へ
フィールドは昔からの入会地（コモンズ）の呼称を継承して「上の原」と呼ばれる。武尊山の麓の標高二〇五〇〜二二〇〇以

ゆるやかな地形だが、ススキ原には火山から噴出した石がごろごろしている。冬の積雪は二層。背後の「須原尾根」（標高一、二七二以）はブナが主体の広葉樹林であり、蓄えられた水が小川となって上の原を潤す。浅川さんの報告によれば、ススキ草原にはタニウツギ、ミスナラなどが侵入し、森林化が進行中だ。

森林資源に恵まれた地域だったが、いわゆる林業地域ではなかった。地元の人々は炭焼きや茅刈りを通じて入会地に関わってきた。今やその関係は消滅し、周囲の空間の多くはダム、スキー場、キャンプ場、ゴルフ場に利用されている。

森林塾のメンバーらが特に注目するのは、茅原と人間との関係についての調査である。上の原は屋根の葺き替え用のカヤ場として入会利用され、野焼きなどの管理が行われてきた。草原に生えるワラビやハギも貴重な収穫物であり、採取時期などの規制もあった。入会慣行という先人の知恵をどのように学び取り、荒廃しつつあ



谷川岳を仰ぎながら茅原保全の作業をする森林塾青水のメンバーら。(05年10月22日写す)

る奥里山の生態系を保全するのか。ボランティアたちの仕事は森林整備から、心の風景の復元へと発展しようとしている。過疎化しつつある集落が、地域丸ごと博物館としてよみがえる日は近い。

(毎日新聞社人口問題調査会

滑志田 隆)

林政ジャーナリストの会の機関紙「林政ジャーナル」第四二号がこのほど発行された。「森林の機能とくらし」をテーマにした連続講演のまとめや会名変更の提案を特集。浅川潔さんの「茅原の保全活動」の報告も収録している。無料。問い合わせは事務局（〇九〇・五五四一・六八九二）へ。